

ドン・キホーテにおける *tratamiento* (呼称法) の混在と “*vos*” の価値 (III)

——サンチョに対するドン・キホーテの *tratamiento*,
tú と *vos* について——

佐藤 玖美子

1. 駒沢大学外国語部論集第30号における拙論“ドン・キホーテにおける *tratamiento* の混在と *vos* の価値” (II) において、筆者は作品中での *tú*⁽¹⁾ の使用の理由として、“無遠慮”とそれに基づく“親しみ”と“軽蔑”，又、これに対する *vos*⁽¹⁾ の使用の理由として、相手に対する“距離”とそれに基づく“冷たさ”と“尊敬”をあげたが、紙面の関係上、論議されるべきドン・キホーテのサンチョに対する *tú* から *vos* への *tratamiento* の変更には言及していない。本稿ではこれを補う意味で、この問題を独立してとりあげ、前述の結論に再度見討を加えてみたいと思う。

Angel Rosenblat は、*La lengua del Quijote* の中で、ドン・キホーテはサンチョに対して通常、親しみの *tratamiento* である *tú* を用いているが、*vos* を用いる場合もあり、それは“怒りによる場合”，“ある距離を置いた場合”，“格式ばった口調をとる場合”(前篇第10, 20, 30章，後篇第28章等⁽²⁾)，あるいは特に理由がない場合(後篇第3, 7, 41, 63章等⁽²⁾)もある、と述べている。

前篇を通じて、ドン・キホーテが普段サンチョに用いている *tú* は、前述の小論でも述べたように、“主”が心を許した“従”に用いる親しみの *tú* であり、階級的な差別を意識した軽蔑の *tratamiento* ではない。では、そうした相手にあえて *vos* を用いる瀬度は果してどの程度であろうか？ この割り合いをどのような基準で算出するかはいくつかの方法があり得ようが、本稿で

は、問題の *tratamiento* が現れるセンテンスを 1（例え同一のセンテンスに同じ *tratamiento* が何度使われようとも）と算える方法をとった。これによると、*tú* が現れるセンテンスは前篇で 277，後篇で 338，計 615 であり，これに対して *vos* が現れるセンテンスは前篇で 8，後篇で 16 で，計 24 しかない。つまり，*tú* に対して *vos* の占める割合は約 2.56 パーセントであり，こうした割合の出し方の適，不適は別として，*vos* の使用がいかにか少ないかは明らかであろう。

2. では一体，どのような場面でドン・キホーテはサンチョに，数少ない *vos* を用いているのであろうか？ *vos* が現れるシチュエーションは，大きくわけて，次の 4 つである。

- 1) サンチョに対して腹を立てている
- 2) 給金と島の統治をテーマにしている
- 3) ドウルシネアの魔法解きのための鞭打ちをこん願している
- 4) 木馬クラビレーニョの冒険の場面での対話

しかし，このいずれの場合にも *tú* を用いるせりふがあり，*vos* が用いられる絶対的条件とは言えない。従って，*tratamiento* の変更は，特にこうしたシチュエーションで起る，ドン・キホーテのサンチョに対する何らかの心理，態度の変化を示すもの，ということになる。

2.1 ではまず，Rosenblat も指適している，サンチョへの腹立ちの場面で *vos* が用いられている例を見よう。

前篇第20章では，激しく物を打つ音を聞き，ドン・キホーテが冒険を求めて近づいてみると，それは布をさらす槌の音で，サンチョに大笑いされる。これに腹を立てたドン・キホーテのせりふでは，始めは *tú* が現れる。

...; de lo cual ya se daba al diablo don Quijote, y más cuando lo oyó decir, como por modo de fisga:—«**Has**⁽³⁾ de saber ¡oh Sancho amigo! que yo nací por querer del cielo en esta nuestra edad de

hierro para resucitar en ella la dorada, o de oro. Yo soy aquel para quien están guardados los peligros, las hazañas grandes, los valerosos fechos...»

(…それだけでもすでにドン・キホーテは腹にすえかねていたのだが、ましてサンチョがひやかすようにこう言うのを聞いたときはいっそう腹を立てた。『わが友サンチョよ、拙者はわが鉄の時代に、黄金時代を、いな金の時代をよみがえらせようと、天意によって生まれてまいったということを知ってもらいたい⁽⁴⁾、あらゆる危険、赫々たる偉業、雄々しい武勲は、ただ拙者のために取っておかれたものだ…』前篇第20章⁽⁵⁾)

ところがこの怒りは続き、次のサンチョのせりふに対する答えでは、*tratamiento* が *vos* に変る。

—Sociéguese vuestra merced; que por Dios que me burlo.

—Pues porque *os burláis*,⁽⁶⁾ no me burlo yo—respondió don Quijote—. *Venid* acá, señor alegre: ¿paréceos a *vos* que si como éstos fueron mazos de batán fueran otra peligrosa aventura, no había yo mostrado el ánimo que convenía para emprendella y acaballa? ¿Estoy yo obligado, a dicha, siendo, como soy, caballero, a conocer y distinguir los sonos, y saber cuáles son de batán o no? Y más, que podría ser, como es verdad, que no los he visto en mi vida, como *vos* los *habréis visto*, como villano ruin que *sois*, criado y nacido entre ellos. Si no, *haced vos* que estos seis mazos se vuelvan en seis jayanes, y *echadmelos* a las barbas uno a uno, a todos juntos, y cuando yo no diere con todos patas arriba, *haced* de mí la burla que *quisiéredes*.

(「旦那さま、そう怒らないでくださいよ、ほんの冗談に言ったんだから」
「なるほどおぬしは冗談かしらんが、わしは冗談ではない」と、ドン・キホーテが答えた。「ねえ、ふざけ屋の先生、かりにあれが布を打つ槌だったように、何かほかの危い冒険だったとしても、拙者がそれに立ち向いあくまでしとげるだけの勇気を示さなかったとでも思うのか？ たまたまわ

しがこれこのとおり騎士の身だからと申して、こういう物音をいちいち聞きわけ、布をさらす槌の音か音でないか、当然区別できなければならんとも申すのか？ のみならず、おぬしはこういうものの中で暮らし、育ち、人となったいやしい百姓であってみれば、これまで見た覚えもあろう。しかし、生まれてこの方拙者がただの一度も見た覚えがないということも、これまた無理のないことであろう。それが嘘だと申すなら、この六個の槌を六人の巨人に変ぜしめて、一人一人なり束になってなり、拙者に襲いかからせてみることだ。もしも拙者が彼らを残らず足を空ざまに投げとばさなかったあかつきこそ、思う存分に拙者を嘲弄いたすがよい」前篇第20章)

このせりふのあと、*has de inferir* で、*tratamiento* はいったん *tú* に戻るが、その同じせりふの連続の後半で、再び *vos* が用いられる。

...De todo lo que he dicho *has de inferir*, Sancho, que es menester hacer diferencia de amo a mozo, de señor a criado y de caballero a escudero. Así, que, desde hoy en adelante, nos hemos de tratar con más respeto, sin darnos cordelejo, porque de cualquiera manera que yo me enojo con *vos*, ha de ser mal paro el cántaro. Las mercedes y beneficios que yo *os* he prometido llegarán a su tiempo; y si no llegaren, el salario, a lo menos, no se ha de perder, como ya *os* he dicho.

(「…サンチョ、おぬしはわしが今申したことから、主人と下男、主君と家来、騎士と従士のあいだにはちゃんとけじめをつけなければならんことを悟ってもらいたいものだ。さればさ、今日以後われわれはお互いにいまして敬意をはらって交り、みだり冗談など申さぬようにしなければならんのだ。なぜというに、たとい拙者がどうかしておぬしに腹を立てたとしても、つまるところは水瓶の損だからな。わしがそなたに約束した恩賞なり報酬はいづれ時がまいれば手にはいるに違いない、よしんば手にはいらずとも、先にも申しかけたとおりに、少くとも給金は取りそこなうことはないはずじゃ」前篇第20章)

つまり、この一連の腹立ちのせりふの中でも、ドン・キホーテのサンチョ_ヨに対する *tratamiento* は *vos* ばかりでなく、*tú* も混っていることがわかるが、*tú* については後述することにして、このせりふの内容を考えてみよう。まずドン・キホーテが布を打つ槌の音を感じ違えるという失態を演じ、これに対する言い訳を行っている、ということなのだが、これは単にサンチョ_ヨを叱っているのではなく、騎士としての失敗をサンチョ_ヨに嘲笑されたことに対する照れかくし、虚勢からくる格好づけのように思われる。つまりこの場合、ドン・キホーテが珍らしく自分の失敗を認めている、ということに注目すべきであろう。

又、これに続くせりふでの *vos* の部分では、“主人と下男”、“主君と家来”、“騎士と従士”、とくどいように上下関係を確認させたあとで、後に問題としてとり上げる給金にまで言及していることから、これは現実的な主従関係の立場を意識して物を言っていることによる *vos* と思われる。

さて、上述のせりふの中で2度現れる *tú* だが、これらはいずれもドン・キホーテが口を切ったすぐ後の導入部分にあり、しかも、*has de saber* (知ってもらいたい)、*has de inferir* (悟ってもらいたい) という似たような句である。つまり、こうした句は後の例にも見られるが、ドン・キホーテの1つの口ぐせであり、*vos* を用いている状況とは無関係に発せられるサンチョ_ヨに対しての1種の決り文句と解釈してよいのではなからうか。

他の例を見よう。前篇第30章に、ドン・キホーテがドウルシネーアの悪口を言うサンチョ_ヨに腹を立て、サンチョ_ヨを地面に打ち倒して言う怒りのせりふがある。後に述べるが、作品中、ドン・キホーテのサンチョ_ヨに対する怒りのせりふは数え切れないほどあり、しかもそのほとんどは *tú* が用いられている。従って *vos* を用いる動機は前例にも見られるように、単なる怒りだけではない筈である。ではこのせりふでは、何がドン・キホーテに *vos* を用いさせているのであろうか。このせりふの特徴は、ドン・キホーテがいやがうえにもドウルシネーアをあがめ奉っていることである。恐らくこの場面では、ドン・キホーテはドウルシネーアを想い姫とする騎士である我が身を再確認し、あるいはそうした意識の高まりの中で語って居り、前例の場合と同様にサンチョ_ヨを親しい

友達のような従士ではなく、そうした崇高な騎士に仕える単なるしもべ、という他人行儀の冷い関係に突き放しているのではなからうか。

—¿*Pensáis*—le dijo a cabo de rato—, villano ruin, que ha de haber lugar siempre para ponerme la mano en la horcajadura, y que todo ha de ser errar *vos* y perdonaros yo? Pues no lo *penséis*, bellaco descomulgado, que sin duda lo *estás*, pues **has puesto** lengua en la sin par Dulcinea. Y ¿no *sabéis vos*, gañán, faquín, belitre, que si no fuese por el valor que ella infunde en mi brazo, que no le tendría yo para matar una pulga? *Decid* socarrón de lengua viperina, y ¿quién *pensáis* que ha ganado este reino y cortado la cabeza a este gigante, y héchoos a *vos* marqués (que todo esto doy ya por hecho y por cosa pasada en cosa juzgada), si no es el valor de Dulcinea, tomando a mi brazo por instrumento de sus hazañas? Ella pelea en mí, y vence en mí, y yo vivo y respiro en ella, y tengo vida y ser. ¡Oh hideputa bellaco, y cómo *sois* desagradecido: que *os veis* levantado del polvo de la tierra a ser señor de título, y *correspondéis* a tan buena obra con decir mal de quien *os* la hizo!

(「ここな卑しい土百姓め、きさまはいつもおれのことに差出口をする余地があると思っているのか？ きさまが間違っただけにいるのを、おれがよしよしと許しておくだけでも思っているのか？ そう思っただけは大間違いだ。罰あたりの悪党めが、きさまはたしかに悪党だとも、世にまたとないドウルシネーアを悪しざまに言いおったからな。土百姓の人足のならず者め、わが腕にかの女性が宿らせてくださる力によらねば、拙者には蚤一匹殺す力もないことを知らんのか？ 口に毒をもつ悪者め（おれはこれをもうできあがった、すでに判定の終わった過去のこととして信じて言うが）、かずかずのいさおしの方便として、拙者の腕をお用いになったドウルシネーア姫のお力がなかったら、誰がいったいこの王国を手中におさめ、この巨人の首を切り、きさまを侯爵にしてくださったか言ってみろ。かの女性は、

おれにのりうつって戦い、おれにのりうつって勝ち給うのだぞ。拙者はかの女性のお命を生き、息をして、かくて拙者は生命と存在を得ているのじゃ。ここな淫売の子の悪党めが、きさまはなんという恩知らずだ！ 土あくたから立ち上って爵位のある身分になりながら、こういう恩恵に報いるに事欠いて、その恩人の悪口をもってするとはなにごとだ！」前篇第30章)

ところで、このせりふの中にも *tú* が混っているが、その部分を見ると「きさまはたしかに悪党だとも、世にまたとないドウルシネーアを悪しざまに言いおったからな」となっている。しかし、*vos* を用いているその同じセンテンスの中頃に、普段の口調の *tú* が混るといのはなにか不自然に思われる。恐らくこの *tú* は、普段の親しみの *tú* に戻ったのではなく、*tú* が用いられるもう一つの動機、つまり“軽蔑”あるいは“嫌悪”の感情の高まりによるものではなかろうか。そしてこの後、更に反論するサンチョに、又 *tú* を用いているが、これも上と同じ理由によるもののように思われる。

—¿Cómo que no la **has visto**, traidor blasfemo?—dijo don Quijote—.
Pues ¿no **acabas de traerme** ahora un recado de su parte?

(「見たことがないとはなにごとだ！ この罰当りの裏切り者め！」と、ドン・キホーテが言った。「おぬしはいまし方あの方からの言伝を持って帰ったところじゃないか？」前篇第30章)

この後、サンチョがどうにかドウルシネーアを美しいと認めたことで、ドン・キホーテは彼に再び *tú* を用いるが、これは普段の親しみの *tú* に戻ったものと言えよう。

—Ahora **te disculpo** —dijo don Quijote —, ...

(「それなら (お前を) 許してやろう」前篇第30章)

又、後篇第28章では、サンチョが、ろ馬の鳴き声を真似たために、ぐろうされたと思った男に殴り倒される。ドン・キホーテはサンチョを助けようとするが、武装した男たちが押し寄せて石を投げ始めたので、サンチョを置き去りにして逃げ出す。その後サンチョに追いつかれたドン・キホーテは、まづい時に

ろ馬なきをしたものだ、とサンチョを責めるが、このせりふでも vos が用いられている。サンチョがかすり傷ひとつないのを見て腹を立てた、と書かれているが、これもやはり単なる怒りではなく、前篇第30章の例と同様、サンチョを置き去りにして逃げた、という騎士にあるまじき行為をした後の、照れかくしによる空威張り、虚勢から vos を用いたものではなからうか？

—¡Tan en hora mala supistes vos rebuznar, Sancho! Y ¿dónde hallastes vos ser bueno el nombrar la sogá en casa del ahorcado? ...Y dad gracias a Dios, Sancho, que, ya que os santiguaron con un palo, no os hicieron el *per signum crucis*⁽⁷⁾ con un alfanje.

(「おぬしも、とんだところでろ馬の鳴き声を披露したものよ、サンチョ！絞首刑に処せられた男の家で、綱の話をしたらよいと、どこの世界で教わったのじゃ？ ...やつらはおぬしに棍棒で十字を切ったが、新月力でおぬしに *per signum crucis* (十字を切る) しかなかったのだから、サンチョ、神に感謝を捧げるがよいぞ」後篇第28章)

このせりふのあとで、ドン・キホーテが逃げ出したことをなじるサンチョに、ドン・キホーテが言い訳けを行っているが、そこでは再び tú が現れる。

...; pero no en dejar de decir que los caballeros andantes huyen, y dejan a sus buenos escuderos molidos como alheña, o como cibera, en poder de sus enemigos.

—No huye el que se retira—respondió don Quijote—; porque has de saber, Sancho, que la valentía que no se funda sobre la basa de la prudencia se llama temeridad,; las cuales por no serte a ti de provecho, ni a mí de gusto, no te las refiero ahora.

(「けんどね、遍歴の騎士さんが逃げ出して、可愛い従士を敵の中へほっぼり出して、いほたの粉だか、磨り餌みてえにさんざんになぐらしといたちゅうことは、黙らせねえでがす」)

「退くものは逃げるのではないわ」と、ドン・キホーテが言った。「と申すのは、サンチョ、よく覚えておくがよい、思慮の上に根ざさぬ勇氣は猪突

の勇と呼ぶ、…だが、そういう物語は、おぬしには用がないし拙者も気がすすまんで、今それを話すことはやめておこう。」後篇第28章)

しかし、この後又サンチョから手痛い反論、非難を受け、*tratamiento* は再び *vos* に変る。

—*Haría yo una buena apuesta con vos, Sancho—dijo don Quijote—: que ahora que vais hablando sin que nadie os vaya a la mano, que no os duele nada en todo vuestro cuerpo...*

(「拙者はな、おぬしと賭けをしてもよいぞ、サンチョ」と、ドン・キホーテが言った。「つまり、誰もさえぎる者もないので、おぬしがそうやってしゃべっている今は、からだじゅうどこも痛むところはないと睨んだがどうじゃな。…」後篇第28章)

又、後篇第3章では、サンチョにドウルシネーアの魔法解きのために受けた棍棒でのなぐりつけに言及されるが、(又その前にサンソン・カラスコの口から、サンチョへのなぐりつけが多すぎる、という批判を聞かされている)、その対応に、ドン・キホーテはやはり *vos* を用いているが、これも前例同様、内心野蛮な行為を強いている非を追求されての、照れかくしのもったいつけの *vos*、とみてよいのではなからうか。なお、この *vos* について、Rosenblat は特に理由のない用法としている。

—*Pues si es que se anda a decir verdades ese señor moro—dijo Sancho—, a buen seguro que entre los palos de mi señor se hallen los míos; porque nunca a su merced le tomaron la medida de las espaldas que no me la tomasen a mí de todo el cuerpo; pero no hay de qué maravillarme, pues como dice el mismo señor mío, del dolor de la cabeza han de participar los miembros.*

—*Socarrón sois, Sancho—respondió don Quijote—. A fee que no os falta memoria cuando vos queréis tenerla.*

(「すると、そのモーロの旦那がやけに真実を書くってことにこだわっているとしたらよ」と、サンチョが口を出す。「ご主人のあいなすった棍棒の

嵐の合間に、わしが受けた棍棒の嵐も出てくるにちがいねえ。というのが、ご主人の背中をたたきのめしているときに、わしにゃからだじゅうところ嫌わずぶちのめさねえことはなかつただからね。だけんどべつに驚くこたあねえでさ。当のご主人が言いなすったように、頭の痛さは手足もわけ合わなきゃなんねえだからね」「ずるいやつよ、サンチョ」と、ドン・キホーテが応じた。「まったくのところ、おぬしは自分で覚えておきたいというときには、けっして忘れたことはないのだからな。」後篇第3章)

全篇を通じて、ドン・キホーテがサンチョに腹を立てて発するせりふは山程あるが、これ迄にあげた以外の例では、すべて *tú* が用いられている。その一つ、前篇第37章から例を引こう。

—Ahora **te** digo, Sanchuelo, que **eres** el mayor bellacuelo que hay en España. **Dime**, ladrón vagamundo, ¿no me **acabaste** de decir ahora que esta princesa se había vuelto en una doncella que se llamaba Dorotea, y que la cabeza que entiendo que corté a un gigante era la puta que **te** parió, con otros disparates que me pusieron en la mayor confusión que jamás he estado en todos los días de mi vida? ...

(「今こそ言うがサンチョめ！ おぬしはスペイン中でいちばんの大それた悪党じゃ、さあ、言え、宿なしの泥坊め、たった今のこと、おぬしゃ、この姫君がドロテアという娘っこに変わったの、拙者が切り落したと確かに承知している人の首が、おぬしを生んだ白首だの、そのほか拙者の今日までの生涯で かつて覚えたこともないひどい当惑におとしいれた、そのほかさまさまのたわごとを申したではないか？」前篇第37章)

もう一つ怒りのせりふを後篇から引こう。第17章で、サンチョは羊飼いかから買ったヨーグルトを、よりもよってドン・キホーテの兜に入れてもらう。しかし、ドン・キホーテはそれに気付かずに兜をかぶってしまったので、顔中ヨーグルトだらけになる。その時の怒りのせりふにも *tú* が用いられている。

—Por vida de mi señora Dulcinea del Toboso, que son requesones

los que aquí me has puesto, traidor, bergante y mal mirado escudero.

(「わが思い姫ドウルシネーア・デル・トボソの生命にかけて誓うが、ここへおぬしが入れたものは牛乳豆腐じゃ、裏切り者めが、ならず者の不屈きな従士めが！」後篇第17章)

以上の例の内容を見ても、こうした *tú* を用いる怒りのせりふには、騎士としての威厳づくり、格好づけのようなものはなく、ただ間抜けな従士を叱かりつけているにすぎない。ヨーグルトの入った兜をかぶってしまったのも、あくまでドン・キホーテの罪ではなく、サンチョの失敗である。

こうしてみると、すでに何度か述べたように、*tú* から *vos* への *tratamiento* の変換は、単純な怒りによるものではなく、そこには騎士としての威厳づけ、虚勢張りの必要性や、主人対家来という現実的な立場の意識による“親しみの関係”の解消がみられるように思われる。

2.2 次に、サンチョへの給金と島の統治をテーマとするせりふで用いられる *vos* を考察してみよう。

まず前篇第10章で、サンチョはビスカヤの男との戦いに勝ったドン・キホーテが、この戦いで島を手に入れたに違いない、その島を治めさせてくれと、こん願する。それに答えて、ドン・キホーテは、いづれ太守にしてやるどころか、もっと立派にしてやる、と答えるせりふで *vos* を用いている。

—*Advertid*, hermano Sancho, que esta aventura y las a éstas semejantes no son aventuras de ínsulas, sino de inclucijadas; en las cuales no se gana otra cosa que sacar rota la cabeza, o una oreja menos. *Tened* paciencia; que aventuras se ofrecerán donde no solamente os pueda hacer gobernador, sino más adelante.

(「考えてみるがよい、サンチョ、この冒険にしても、これに類したそのほかの出来事にしても、島で起ったことではない。四つ辻での出来事だ。こういう出来事で受けるものは、せいぜい頭を割られるか、片方の耳を失う

ぐらいが関の山だ。まあ辛抱してもらいたい、いずれはおぬしを大守にするどころか、それよりもっと立派にしてやることもできる冒険がもちあがるに相違ないわい」前篇第10章)

又、次の例は後篇第3章で、やはり話がサンチョが島の太守となるというテーマに及ぶ場面である。得業士が、“サンチョがドン・キホーテの言う島を信じたということは、あまりにお人よしだ、と言っている人もある”というのに答えて、ドン・キホーテはまずサンチョを主語とした3人称単数形を用いて、次のように述べる。

—Aún hay sol en las bardas—dijo don Quijote—; y mientras más *fuere* entrando en edad **Sancho**, con la experiencia que dan los años *estará* más idóneo y más hábil para ser gobernador que no *está* agora. (「いまだ日は土塀の上でありじゃ」と、ドン・キホーテが言った。「それに、もう少し年をとってじゃ、サンチョ、年とともに経験をつんだら、太守になるにも、現在よりはもっと適した、もっと手腕もできるにあるまいて」後篇第3章)

この会田由氏の訳は、サンチョに語りかけている形でなされているが、原文では前述のようにサンチョは主語であり、このせりふは得業士に向けられて発せられている。つまり、直訳は「サンチョがもう少し年をとり、年とともに経験をつんだら、…」である。そして、これを耳にしたサンチョが、“島を治める才覚が自分にかけているのではなく、悪いのは島がどこにあるかわからないことだ”と言ったのに対し、ドン・キホーテは次のように *vos* を用いて応じている。

—*Encomendadlo* a Dios, Sancho—dijo don Quijote—; que todo se *hará* bien, y quizá mejor de lo que *vos pensáis*; que no se mueve la hoja en el árbol sin la voluntad de Dios.

(「神にお願い申すのじゃな、サンチョ」と、ドン・キホーテが言った。「そうすれば万事がうまく運び、いや、おそらくおぬしが思っているより上首尾になろうというものじゃ、というのも、神のご意志がなくては木の葉一

枚動かぬのだからな」後篇第3章)

次に、後篇第7章の例を見よう。まず、サンチョが給金の話を匂わせると、ドン・キホーテの *tratamiento* は次のように vos になる。

—Teresa dice—dijo Sancho—que ate bien mi dedo con vuestra merced, y que hablen cartas y callen barbas, porque quien destaja no baraja, pues más vale un toma que dos te daré. Y yo digo que el consejo de la mujer es poco, y el que no le toma es loco.

—Y yo lo digo también—respondió don Quijote—. *Decid*, Sancho amigo; *pasá* adelante, que *habláis* hoy de perlas.

(「テレサはね」と、サンチョが応じた。「お前さまとわしの間で前もってしっかり取決めをしておくがいい、書いたもなゝもの言うが、口約束は役に立たねえ、それってのが、カルタの切り手はませ手じゃねえし、『さあおとり』一つは、『いづれやろう』の二つよかも値打ちがあるんだからっていうんですが。で、わしが言いてえのは、女の助言なんぞ取るに足らねえ、だけんどそいつを取りあげねえ男は気違えだとね」

「わしもそう思うぞ」と、ドン・キホーテが答えた。「さあ話すがよい、わが友サンチョ、先へすすめるがよいぞ、今日おぬしは真珠の言葉を吐くようだの」後篇第7章)

次のせりふからドン・キホーテの *tratamiento* は一時 tú に戻る。そして再び“給金”を口にするはじめのせりふはまだ tú で行われているが、その長いせりふの途中から又、vos になる。

—Y tan entendido—respondió don Quijote—, que he penetrado lo último de **tus** pensamientos, y sé al blanco que **tiras** con las innumerables saetas de **tus** refranes. **Mira**, Sancho; yo bien **te** señalaría salario, si hubiera hallado en alguna de las historias de los caballeros andantes ejemplo que me descubriese y mostrase por algún pequeño resquicio qué es lo que solían ganar cada mes, o cada año; pero yo he leído todas o las más de sus historias, y no me acuerdo haber

leído que ningún caballero andante haya señalado conocido salario a su escudero; sólo sé que todos servían a merced, y que cuando menos se lo pensaban, si a sus señores les había corrido bien la suerte, se hallaban premiados con una ínsula, o con otra cosa equivalente, y por lo menos, quedaba con título y señoría. Sé con estas esperanzas y aditamentos *vos*, Sancho, *gustáis* de servirme, sea en buena hora; que pensar que yo he de sacar de sus términos y quicios la antigua usanza de la caballería andante es pensar en lo excusado: así que Sancho mío, *volveos* a *vuestra* casa, y declarar a *vuestra* Teresa mi intención; y si ella gustare y *vos gustárades* de estar a merced conmigo, *bene quidem*⁽⁷⁾; y si no, tan amigo como de antes; que si al palomar no le falta cebo, no le faltarán palomas. Y *advertid*, hijo, que vale más buena esperanza que ruin posesión, y buena queja que mala paga. Hablo de esta manera, Sancho, por daros a entender que también como *vos* sé yo arrojar refranes como llovidos. Y, finalmente, quiero decir, y *os* digo, que si no *queréis* venir a merced conmigo y correr la suerte que yo corriere, que Dios quede con *vos* y *os* haga un Santo; que a mí no me faltarán escuderos más obedientes, más solícitos, y no tan empachados ni tan habladores como *vos*.

「いや、ようくわかったぞ」と、ドン・キホーテが応じた。「おぬしの思惑の底の底までわかったぞ。おぬしが次々に放ったことわざの矢の的も読めたわい。よいかな、サンチョ、もしも遍歴の騎士の物語のいずれかに、従士が月々、もしくは年々に、いくら稼ぐものか、わずかな隙間からでもうかがわせ、におわせてくれる例を見つけていたら、わしは喜んでそなたの給金をきめてやったろう。しかし、わしは騎士たちの物語をことごとく、いや、大部分を読んでまいったが、いかなる遍歴の騎士もおのれの従士にちゃんときまった給金と約束したということは読んだ覚えがない。ただ

知っておるのは、従士はことごとく当てがい扶持ちで仕えていたと申すことと、思いもよらぬときに、主人の武運がひらけて、一つの島なり、もしくはそれに等しいものを与えられ、また、少くとも、爵位をもらって貴族につらなつたと申すことじゃ。かような望みと景物ほしきで、サンチャョよ、おぬしがふたたび拙者に仕えようと思うなら、まことに嘉すべしじゃ、しかし拙者が遍歴の騎士道の古い習わしの範囲なり常道から逸脱せねばならんようなことを思うておるなら、それはしょせん無駄な考えと申すもの。それならば、わが親しいサンチャョよ、そなたは家に立ち帰って、拙者の意向をテレサに伝えるがよい。もしまた、拙者の当てがい扶持を、女房もおぬしも承知とあらば、*bene quidem* (大いによろし) じゃ。もしまた不承知なら、昔の友達づき合いになるまでのこと、鳩舎に餌があれば、鳩に事欠くまいて。ところで、おぬし、知っておくがよい、よき希望は、さもしき所有にまさり、また、よき嘆息は悪しき支払いにまさるとな。拙者がこういう言い方をいたすのは、よいかサンチャョ、拙者もおぬしに劣らず、ことわざを雨と降らすことができると申すことを、おぬしに悟らせたいからよ。要するに、おぬしに申したいことは、いや、言ってきかせるがもしおぬしが当てがい扶持で拙者の供をし、運命をともにするのがいやだと申すなら、おぬしは神とともに残ってのんびり暮らすがいよということよ。拙者にはおぬしより従順で、さらに気をつく、おぬしのごとくぶきっちょでも、おしゃべりでもない従士には事欠くまいからな」後篇第7章)

この例を見ると、給金や島の話題が必ずしも *vos* でなされるとは限らず、*tú* が用いられることもある、ということになる。しかし、ではこのせりふで、はじめは *tú* が用いられながら、何故途中から *vos* に変わっているのだろうか？ “わしは遍歴の騎士の物語をことごとく、いや大部分読んでまいった…” というあたりから、恐らく自分が騎士であり、サンチャョは給金をとやかくいう職業的な従士、という現実的な関係に目覚めてくるのではなからうか？ そして、以後このせりふの終り迄 *vos* で通しているということは、そうした相手を他人行儀な関係に突き離れた態度が続いた、ということであろう。なお、このせ

りふの後にサンソン・カラスコが入って来て話は途切れ、その後サンチョに対する *tratamiento* は、再び *tú* に戻っている。

ではもう一つ、後篇第28章の例を見よう。ドン・キホーテはサンチョに対して、はじめは *tú* を用いているが、同じ談話の連続の中で話題が給金に及ぶと、やはり *vos* に変っている。

—Confieso—dijo don Quijote—que todo lo que **dices**, Sancho, sea verdad. ¿Cuánto parece que *os* debo dar más de lo que *os* daba Tomé Carrasco?

—A mi parecer—dijo Sancho—, ...

.....

—Está muy bien—replicó don Quijote—; y conforme al salario que *vos os habéis señalado*, veinticinco días ha que salimos de nuestro pueblo: *contad*, Sancho, rata por cantidad, y *mirad* lo que *os* debo, y *pagaos*, como *os* tengo dicho, de *vuestra* mano.

—¡Oh, cuerpo de mil—dijo Sancho—que va vuestra merced muy errado en esta cuenta; porquo en lo de la promesa de la ínsula se ha de contar desde el día que vuestra merced me la prometió hasta la presente hora en que estamos.

—Pues ¿qué tanto ha, Sancho, que *os* la prometí?—dijo don Quijote.

(「拙者も認めるぞ」と、ドン・キホーテが言った。「おぬしの言っていることは本当だとな、サンチョ。で、トメ・カラスコが出していたより、拙者はいくらよけいにおぬしに払ったらよいかな?」

「わしの考えじゃ」と、サンチョが答えた。

.....

「よかろう」と、ドン・キホーテが答えた。「そんなら、われらが村を出てから二十五日になる。そこでおぬしが自分できめた給料に従って、サンチョ、割りふって計算いたすのじゃ。そしていくら拙者がおぬしに支払わねばならんかよく見積って、先にも申したとおり、おぬしの手で、それを

受け取るがよいぞ」

「あっ、いけねえだ！」と、サンチョが叫んだ。「この計算じゃ、お前さまとんだ間違いをしてなざるだ。というのはね、島の約束の一件はお前さまがわしに言いだしなさった最初の日から、わしらのいる今日只今まで、計算しねえといけねえだからね」

「そうすると、拙者がおぬしに、その約束をしてから、どれだけの日数になるかな、サンチョ？」と、ドン・キホーテが言った。(後篇第28章)

このせりふで *vos* は終り、次にサンチョがドン・キホーテに仕えて20年になる、などと大げさに言うのに笑い出して、まだ島の統治と給金の話題が続いていながら、*tratamiento* は *tú* が用いられている。恐らく、このサンチョのずるいせりふで、ドン・キホーテは気分的にサンチョと親しみの関係に戻ったのではなからうか。

..., y ¿dices Sancho, que ha veinte años que te prometí la ínsula?...

(「…それをおぬしは、拙者が島の約束をしてから、二十年になると言うのじゃな、サンチョ?…」後篇第28章)

たしかに、給金や島の統治問題のように、主従関係を客観的なものにする話題では、相手への親しみが忘れられ、主と従という距離を置いた他人行儀の関係が自覚されるのは当然であり、*vos* はそうした時のドン・キホーテの騎士としての気取りの入った重々しい口調をよくあらわしているように思われる。

しかし、前例にもあるように、そうした話題になると必ず *vos* が用いられるかと言えばそうとは限らず、*tú* を用いている例があることも確かである。

例えば、前篇第7章で、ドン・キホーテは島のことを念を押すサンチョに、程なく島が手に入ることを請合い、又もっと大きい望みを持つように言うが、このせりふではすべて *tú* が用いられている。

... Y no lo tengas a mucho; que cosas y casos acontecen a los tales caballeros, por modos tan nunca vistos ni pensados, que con facilidad te podría dar aún más de lo que te prometo.

(「…しかしおぬしはこれを誇張だなどとは思うまいぞ。なんと申してもか

くのごとき騎士らには事柄も事件も、およそかって聞いたことも思って見たこともないような方法で降りかかるものだから、拙者がおぬしに約束したことより以上のものさえ容易に与え得ようもしれぬからじゃ」前篇第7章)

ただし、これは作品中ドン・キホーテのサンチョに対する最初のせりふであり、二人の関係を示す上で、作者はドン・キホーテにどうしても *tú* を使わせなかったとも考えられる。なお、Rosenblat は、前に引用した後篇第3章、第2章の *vos* を特に理由のない用法としているが、上の例のような場合は例外として、Rosenblat 自身も述べているように、*vos* を用いることでもったいぶった口調となるとすれば、特にこうした話題ではドン・キホーテが兎角騎士気分酔い、全部ではないにしても、大部分のせりふで *vos* が現れることは、ごく自然であると言えよう。

2.3 次に、ドン・キホーテがサンチョに、ドウルシネーアの魔法解きのための鞭打ちを頼むせりふを考察しよう。

後篇第63章では、次のように *vos* を用いているのが見られる。

—¡Ah, Sancho amigo, y con qué brevedad y cuán a poca costa os *podíades vos*, si *quisiédes*, desnudar de medio cuerpo arriba, y ponerlos entre estos señores, y acabar con el desencanto de Dulcinea! ...

(「おお、仲よしのサンチョよ、おぬしがいやでさえなかったら、上半身を裸にしてこの方々の間に身を置き、ドウルシネーア殿の魔法解きをし終えるのはそれこそなんと造作なく手取り早くできると思わぬか。…」後篇第63章)

こうした *vos* は日頃サンチョがいやがっている鞭打ちを無理強いする際の、権力の押しつけ、つまり主人対家来という現実的な立場から物を言おうとして出てきたように思われる。しかし、ドン・キホーテの方にも恐らく良心の苛責による弱みがあり、それがはじめの“Sancho amigo” (仲よしのサンチョよ) に表わされているように思われる。鞭打ちへのこん願のせりふは全編を通じて

沢山あるが、この例と後篇第41章の例以外では *tú* が用いられている、ということもそうしたドン・キホーテの感情を物語っているものではなからうか？

では後篇第41章における問題のせりふを見よう。この章では、空飛ぶ木馬クラビレーニョでの冒険が仕組まれるが、その木馬に乗る前に、ドン・キホーテはサンチョを皆から離れたところに連れ出して、出発前にドウルシネアのための鞭打ちを500済ませてくれるように頼む。そして、この場合その呼び出しが *vos* でなされているのだが、本題に入ると *tratamiento* は *tú* に変わっている。Rosenblat は前例第63章の *vos* 及びこの呼び出しの *vos* についても、理由のない *vos* の1つに加えているが、恐らくドン・キホーテの心理としては、ここはまず相手に従者であることを自覚させるもったいぶった態度をとって *vos* を用い、その後、やはり良心がとがめて気弱になり、*tú* に切り変えたのではなからうか？ 例を見よう。

... Pero, *llegaos* aquí, Sancho; que con licencia destos señores *os* quiero hablar aparte dos palabras.

.....

—Ya *vees*, Sancho hermano ...; y así querría que ahora *te retirases* en tu aposento, ..., y en un daga las pajas *te dieses*, a buena cuenta de los tres mil y trescientos azotes a que *estás* obligado, siquiera quinientos, que dados *te los tendrás*; ...

「…だが、サンチョ、ここへまいれ。ここにおいでのお歴々のお許しを得て、拙者はおぬしに、二人きりでふたことみこと申し聞かせたいことがある」

「のう、兄弟サンチョよ、…そこで、何か道中で入り用なものを探しにゆくような様子で、拙者は今おぬしに、おぬしの部屋へ引っ込んで、おぬしが引きうけている三千三百の鞭打ちの内入れとして、自分にいいと思うだけ、せめて五百ぐらい、ほんのちょっとの暇に、みずから鞭打ってもらいたいと拙者は思うのだがの。と申すのも、物事を始めるということは、半ば成就したことだからじゃ」(後篇第41章)

前述のように、この他鞭打ちへのこん願のせりふはあちこちに見られるが、すべて **tú** が用いられている。以下、後篇第68章、69章、71章の例を引くが、これらでも、ドン・キホーテが **tú** を用いてサンチョに鞭打ちを頼みこんでいるのが見られる。

... **Levántate, por tu vida, y desvíate algún trecho de aquí, y con buen ánimo y denuedo agradecido, date trescientos o cuatrocientos azotes a buen cuenta de los del desencanto de Dulcinea; y esto rogando te lo suplico; ...**

(「…ひとつお願いだから起きてくれ。そしてここから少し向うへ行って、勇気をふるって、ありがたいという気持をもって、ドウルシネーア姫の魔法を解くための鞭打ちの一部として、三百なり四百おぬしのからだに鞭を加えてくれい。これはわしが折り入ってお前に頼むことじゃ。…」後篇第68章)

—Agora es tiempo, hijo de mis entrañas, no que escudero mío, que **te des** algunos de los azotes que **estás** obligado a dar por el desencanto de Dulcinea. Ahora, digo, que es el tiempo donde **tiene**s sazónada la virtud, y con eficacia de obrar el bien que de **ti** se espera.

(「さあ、今では、わしの従士としてではなく、わしの大事な伴よ、おぬしがドウルシネーアの魔法を解くために負っている鞭打ちをいくつかそなたのからだに加えるがよい。おぬしの不思議な力が、ちょうど充実しているこの時だと申しているのだ。しかも人々がおぬしに期待していた立派な仕事をやってのけた、その功德によってもじゃ」後篇第69章)

—**Tú tienes razón, Sancho amigo—respondió don Quijote—, ... De mí te sé decir que si quisieras paga por los azotes del desencanto de Dulcinea, ya te la hubiera dado tal como buena; pero no sé si vendrá bien con la cura la paga, y no querría que impidiese el premio a la medicina, con todo eso, me parece que no se perderá**

nada en probarlo: **mira, Sancho, el que quieres y azótate luego, y págate de contado y de tu propia mano, pues tienes dineros míos. ...**

(「おぬしの言うのももっともじゃ、わしの友サンチョよ」と、ドン・キホーテが答えた。「…もしもドウルシネーアの魔法を解くための鞭打ちに対して、支払ってもらおうという気があるなら、それこそきちんとおぬしに払ってやってもよいと、わしは約束してもよいぞ。だが、払っただけの効果がちゃんとあるかどうか、そいつはわしにもわからんし、お礼をしたために薬の効果がなくなるなどということもわしは心配じゃ。とはいうものの、ためしてみたところで、なにも損するわけではないように思われるわい。そこでサンチョ、どれだけほしいか考えてみて、それからすぐにわが身を鞭打って、わしの金はおぬしが持っていることだから、現金でおぬし自身の手から受け取るがよい。」後篇第71章)

つまり、こうしてみると、前にも述べたように、鞭打ちのこん願では、給金問題や島の統治の問題と違って、ドン・キホーテの立場が弱く、ほとんどの例で“兄弟サンチョ”とか、“わしの大事な伴よ”、“わしの友サンチョよ”と親しげに呼びかけ、又“わしの従士としてではなく…”と言っているように、どうかサンチョにその実行を頼みこむには、親しみの関係を強調する方が得策と考え、それで *tú* を用いているように思われる。そしてこのことから、*tú* から転じた *vos* の使用がもったいぶった口調ととられる可能性があることが十分に察せられる。

2.4 もう一つ *vos* が現れるシチュエーションは後篇第41章の空飛ぶ木馬クラビレーニヨにまたがる場面である。いざ木馬にまたがろうとする時、ドン・キホーテは恐怖にふるえるサンチョに *vos* を用いて次のように命令している。

—*Tapaos, Sancho, y subid, Sancho; ...*

(「眼かくしをせい、サンチョ、そして馬に乗れよ、サンチョ。…」後篇第41章)

この後しばらくサンチョへのせりふがなく、次に改めてサンチョに口をきく所からは、*tratamiento* は *tú* に戻っている。

—*Ladrón, ¿estás puesto en la horca por ventura, o en el último término de la vida, para usar de semejantes plegarias? ...*

Cúbrete, cúbrete, animal descorazonado, y no te salga a la boca el temor que tienes, a lo menos en presencia mía.

(「この泥棒めが！ そういう大げさなお祈りをして、おぬしゃ絞首台に登ってでもいると思うのか、それとも生命の、いまわの際にさしかかっているとでも申すのか？…さあ、目隠しをせい、目隠しをせい、この憶病なけだものめ、おぬしの憶病風を、少なくとも拙者の面前では口に出さぬようにせい」後篇第41章)

では、はじめのせりふの *vos* はどういう心理によるものであろうか？ 恐らくは、これから騎士として危険な冒険に乗り出す気分になったドン・キホーテが自分自身をも勇気づける意図から、威勢よく、一介の従士としてサンチョに命令したものでなからうか。そして、次のせりふで、同じ場面であり、同じように目隠しをすることを命令しているにも拘らず *tú* が用いられているのは、いやがるサンチョに愛想をつかし、軽蔑、嫌悪の *tú* が現れたのではなからうか？ あるいは、ドウルシネーアの魔法解きのための鞭打ちの場合と同様に、サンチョをなんとか納得させようと、親しみの関係をとるかい柔策に出たための *tú* とも思われる。いずれにせよ、このせりふが *tú* で行われていることで、ドン・キホーテのサンチョに対する歯がゆさ、じれったさがよく表わされているのではなからうか？

さて、この同じ章の最後で、サンチョはクラビレーニョでの旅の様子を、いかにも本当に体験したことのように、公爵夫妻及び一同に向って、まことしやかに話す。これを聞いたドン・キホーテは、サンチョの耳もとに次のように *vos* で話しかける。

—*Sancho, pues vos queréis que se os crea lo que habéis visto en el cielo, yo quiero que vos me creáis a mí lo que vi en la cueva de*

Montesinos. Y no os digo más.

(「サンチョ、おぬしが天上で見たと申すことを、人に信じてもらいたいと思うなら、拙者はおぬしに、拙者がモンテシーノスの洞穴で目撃したことで、拙者の申すことを、おぬしに信じてもらいたいものじゃ。ところで、このうえ、おぬしには、何も申すまいて」後篇第41章)

このせりふは *tú* でなされても何の抵抗もないように思われるが、では何故 *vos* を用いているのであろうか。恐らくドン・キホーテは、サンチョがクラベレーニョの旅で自分が見なかったものを見た、騎士である自分はなぜ見なかった、という劣等感からくる虚勢張りの *vos* を用いているのではなからうか？ つまり、従士のくせに生意気である、という姿勢である。そしてだからこそ自分もこれに対抗してモンテシーノスの洞穴を持ち出しているのではなからうか？ あるいは、多くの学者の説にあるようにドン・キホーテが真の狂人ではなく、それをよそおっているにすぎないとすれば、彼はサンチョがドン・キホーテ化したのをやゆして、それならばサンチョが信じていないモンテシーノスの洞穴の話も同じではないか、と暗に仕返しをしているとも思われる。しかし、いづれにしても、ここでドン・キホーテがサンチョを威圧しようとしていることをこの *vos* が明らかにしているのではなからうか？ なお、この箇所について、午島信明氏は「反＝ドン・キホーテ論」において、“ドン・キホーテ自身がサンチョと対等の関係を認める時がやってくる” つまり、このせりふによってドン・キホーテの狂気がサンチョに感染したとして、“従士の地位の向上を認めるのである” としているが、そうになると、この *vos* はドン・キホーテがサンチョに用いる唯一の尊敬の *vos* ということになる。しかし、このせりふの最後でドン・キホーテは **Y no os digo más.** (この上おぬしには何も申すまいて。) と、とどめをさしている。この一言で、このせりふの *vos* は、やはりドン・キホーテが従者としてのサンチョに対する威圧から用いられているもののように思われる。

3. Rosenblat は、上の例の *vos* をも特に理由のない用法の中に入れてい

しかし、こうした理由のない vos, つまりは作者セルバンテスによっても特に意識されていない vos が現れ得るとすれば、ドン・キホーテのサンチョに対するおびただしいせりふの中で、もっとしばしば用いられてもよい筈ではなからうか？ 筆者には、やはりドン・キホーテがサンチョに用いる数少ない vos は、セルバンテスなりの注意深い意図のもとに用いられているように思われる。

ではその意図は何であろうか？ これ迄の vos を総合すると、次の二つのように思われる。

1. 騎士としての反省の上に立った照れかくし、威厳づくりあるいは虚勢
2. 主人対家来という現実的な立場の自覚、崇高な騎士としての自己とう酔

こうした意識が、特に自分の失敗や、給金、島の統治の問題、鞭打ちのこん願などの場面で、普段は親しみの関係にあるサンチョに対して顔を出し、それが *tratamiento* を tú から vos に変換させているのではなからうか。それはサンチョに対する“親しみ” → “親しみ” の関係の解消であるが、その“親しみ” の関係の解消によって置かれる距離があらわすものは、サンチョに対する尊敬ではなく、単に話し手ドン・キホーテのもったいぶった態度の反映でしかないように思われる。

以後、時代と共に vos の使用は相手に対する軽蔑ととらえる傾向が強まってゆくが、それは、こうした vos が相手にマイナーに、つまり話し手が聞き手に対して横へいな態度をとっている、と受け取られてゆく結果ではなからうか。その芽が、ドン・キホーテのサンチョに用いる vos の中にすでに見られるように思われる。

(続く)

注

- 1) 以後、動詞及び代名詞、所有形容詞に2人称単数形が用いられている場合を tú (の使用)、単数の対象に対して2人称複数形が用いられている場合を vos (の使用) とする。
- 2) “等 (etc.)” は Angel Rosemblat によるもの。

- 3) ゴシック体は *tú* の使用箇所。
- 4) 波線は *tú* 使用部分の訳を示す。
- 5) 訳文はすべて会田由訳『ドン・キホーテ』による。
- 6) イタリック体は *vos* の使用箇所。
- 7) 原文でイタリック。

参考文献

- Miguel de Cervantes: *El ingenioso hidalgo Don Quijote de la Mancha*, Espasa-Calpe, Colección Austral, 1986
- Iraset Paez Urdaneta: *Historia y geografía hispanoamericana del voceo*, La casa de Bello, Caracas, 1981
- Angel Rosenblat: *La lengua del Quijote*, Gredos, 1978
- Rafael Lepesa: *Historia de la lengua española*, Geodos, 1986
- ハイメ・フェルナンデス: ドン・キホーテへの招待, 西和書林, 昭和60年
- 会田由訳, セルバンテス: ドン・キホーテ, 晶文社, 1985
- 午島信明: 反=ドン・キホーテ論, 弘文堂, 平成元年